

奈良伝承

第6回

伝統の技などさまざまな技術を受け継ぐ若き担い手にスポットをあて、その仕事への思いなどを語っていただきます。



釉掛けをしている古瀬さん

確かにそう思われている方も多いようですが、この土地は古くから赤膚山と呼ばれていたことから、名前の由来は地名から来ているともいわれています。また色合いも、青っぽいものからピンクっぽいものまで、その時の焼き具合、季節などによつていろいろあるんです。

赤膚焼って、赤い肌をしているから、そう呼ぶんじゃないんですか？

赤膚焼は、1583年、豊臣秀吉の弟で、大和郡山城主の秀長が、愛知県常滑の陶工を招き、赤膚山で茶器を焼かせたのが始まりとされています。窯元は、奈良市に4軒、大和郡山市に2軒あります。乳白色の柔らかい風合いと、奈良絵文様が特徴で、湯飲みや花瓶、壺、皿、などさまざまなものが作られています。

奈良を代表する特産品
「赤膚焼」を受け継ぎ
守っている女性陶芸家

陶芸家 赤膚山元窯 古瀬 堯三さん



①成形
まず原料の土を赤膚山から掘り出し粘土をつくります。それをろくろや型を使って形を作っていきます。



成形

では、そんな赤膚焼はどうやって作るんですか？

赤膚焼には特徴的な絵があります。あれはどれにも付いているんですかね？

奈良絵は赤膚焼の特徴ですが、ないものもあります。源流は、東大寺の大仏さんの台座に描かれている図様にあるといわれ、赤膚の器等にマッチするようにデザインされています。奈良にちなんだものも多く描かれています。

②乾燥
形ができると、乾燥に適した場所に保管し、丁寧に乾燥していきます。

③素焼き
乾かした後、素焼きをします。



乾燥

④釉掛け
その後、「わら灰」(藁を焼いた灰)を主成分にした釉をかけます。この釉をかけることで、丈夫で美しい製品に仕上がります。

⑤本焼き
釉掛けして乾かしたものを本焼きします。登り窯では、季節や天候等を考慮して、ゆつくりと時間をかけて1300℃くらいまで温度を上げていきます。



本焼き

⑥絵付け
本焼きが終わると完成です。そこに奈良絵などを描いたりします。



絵付け



江戸時代から使われ、国の登録有形文化財に登録されている登り窯

赤膚山元窯
古瀬 堯三



〒奈良市赤膚町1049
☎ 0742・45・4517
FAX 0742・45・6726
URL www.1.kcn.ne.jp/~akahada/

手づくり体験・絵付け体験あり(要予約)。その他の窯元の作品など、赤膚焼は「きてみてならSHOP」(近鉄奈良駅1番出口からすぐ)などでも購入できます。

では、最後に今後の目標を教えてください。

赤膚焼は、地元の人に愛され、何世代にもわたり使われ続け、育ってきました。「人に使ってもらって初めて完成する」と父が守り続けてきたこの赤膚焼を、一人でも多くの方に知ってもらいたいです。そして、世代を超えて愛用していただける品を世に出し続けるのが目標です。

お父さんの教えで「一番心に残っていることはなんですか？」

「いろんな角度から見ると、初めてものの本質が分かる」ということです。陶器も一つの点ばかりにのめり込んでいたら、全体のゆがみが見えなくなります。この奈良も、外国の大学で勉強するようになって、初めてその良さに気付くようになりました。

うようになり、父を師匠として教わってました。そして、3年前に父が亡くなり、私が堯三を襲名することになったんです。